新年のあいさつ

（2023.1.1）

新年おめでとうございます。2022 年の創風社の新刊は次のようになります。最初の二点は，発行の準備は前年にほぼ終了していましたが，書店への流通は 2022 年になったものです。

福田泰雄『格差社会の謎』
三石初雄他『校内研究を育てる』

三須田善暢『農村社会の組織化と営農志向①』
石毛・小菅・伊藤『わかりやすい薬理学　16 版』
2023 年　子どもカレンダー

現在，2023 年１～４月に発行予定で作業がかなりすすんでいるものが５点あります。コロナ渦３年目も何とかのりきり，これから４年目にはいるわけですが，コロナの感染状況には注意して，慎重にすすみたいと考えています。
2023 年の新刊は次のようになる予定です。後半の予定はまだです。

大澤健（和歌山大学）『マルクスの労働価値論』
山﨑準二（学習院大学）『教師と教師教育の展望――結・教師のライフコース研究』
山口拓実（神奈川大学）『理念の経済倫理――人権，アニマルウェルフェア』
高野範城（弁護士）『夫婦・親子で考える 40 歳から 100 歳までの過ごし方――定年前後の安定と充実した生活の設計とは――』
石毛・小菅・伊藤『わかりやすい薬理学　第 17 版』
2024 年　子どもカレンダー

新年に２点の経済学研究書の出版を予定していますが，著者の２人はともに東北大学大学院（経済原論）の出身です。この研究室は戦後，田中菊次先生が教授として，そのあとを柴田信也先生が引きつぎ，私とこの研究室は約 50 年近い長いつきあいがあります。
田中・柴田両先生のもとで学んだ研究者の専門書を，創風社は 15 点近く出版しています。創風社が今のような出版活動を続ける１つのきっかけは，私が田中菊次先生の講義を受講したことが出発点です。東北大学は戦前文系学部は法文学部として１つしかなく，その中に現在の法，経，文，教の全学部が入っていました。そのためか，戦後，1960 年代までは文系学部は，どの学部の講義も受講でき，自分の所属する専攻学科と関連の深い講義は他学部でも卒業単位として認定されていました。私は大学３年，４年と２回，田中菊次先生の経済原論を受講して，４月の１ヵ月で受講を断念しました。かなりの予習をしないとついていけないむつかしい講義でした。卒業後，社会科学，人文科学の専門出版社で編集の仕事をしたいと思う１つのきっかけが田中先生の講義でした。その田中・柴田先生のもとで研究者になった大澤，山口先生の本を，2023 年のスタートに出版できるのは，私にとって歴史を振り返る仕事にもなります。
私は大手の教育系出版社で５年働いて，その後中堅の社会科学，人文科学の専門出版社で本格的に自分がやりたいと思っていた仕事をするようになりました。私は自分の専門分野にこだわらず，かなり広く取組みました。取組んだのは，会社としてすでに進行しているもの，自分で企画したもの，いろいろあります。
現代社会学大系（全 15 巻），社会科学の講座を２回（哲学，経済学，政治学，歴史学）企画しました。編集委員（哲学は芝田進午，島田豊，経済学は金子ハルオ，林直道，歴史学は２回とも永原慶二，政治学は２回とも田口富久治，２回目は全６巻なので藤田勇，服部文男）の各先生が考えている，章編成，執筆者の選定，研究会の開催を私が担当編集者としてすすめ，各分野の 100 人ぐらいの研究者に参加してもらい５年間ぐらいかけて２つの講座の完成にこぎつけました。発行部数は２つの講座（４巻と６巻）で合計 10 万部以上発行できました。講座終了後，参加した研究者の専門書もかなり出版しました。創風社の設立は１分野中心ではここまでこれませんでした。私がいくつもの分野を手がける土台はこの時つくられました。
それから私が会社からの指示ですでに刊行されていた教育学講座の編集委員の五十嵐顕先生（東大）の構想する教育関係の出版物も担当するようになりました。五十嵐先生からは３人の教育学著作集（矢川徳光，宗像誠也，小川太郎）の発行を依頼され，３点の著作集を出版し，その中で関連した教育学者の単行本もかなり出版しました。五十嵐先生は浦和に住んでいて埼玉県内の保育，教育にも広くかかわっていて，さくら・さくらんぼ保育園の斎藤公子先生も紹介されて，深谷市のさくらんぼ保育園にもよく出かけるようになりました。70 年代～ 80 年代～の編集者としてさまざまの分野で 150 点近い出版物を出して来ましたが，80 年代になるともう私が出版する出版物はピークを過ぎていて本を出しても 70 年代のように売れないという結果が出て来ました。哲学・経済学・社会学・歴史学・政治学・教育学とどの分野も同じように下降線になっていました。下降線になったその原因は，大きく社会が変化し，大学の研究状況や，読者の状況が変わってきたのです。1960 ～ 70 ～ 80 年代までは，戦争体験のある研究者が各分野の学問研究の中心に多くいました。そして，その研究者たちと門下生が，平和と民主主義に基づく日本社会の形成に学問研究がどのように貢献していくか，そういう課題を追求し各分野の学問研究が活発でした。そしてその研究成果を専門書としてまとめる研究者は全国にいて読者も多くいました。しかし，60 年代の東京オリンピック，70 年代のベトナム戦争のころからの日本資本主義の成長は急速で，大学の研究は，日本経済の成長の担い手を大学がどう育てるかという方向にシフトしていて，大学の役割は，日本資本主義の成長に貢献することが重要な目的となり，真理の探究はどこかに行ってしまいました。2020 年頃から本格的になった日本学術会議への政治の干渉は学問を真理の探究から政治の意のままにする集大成のように見えます。今までのような本を出版しても下降線をたどるだけでした。多くの同業の出版社は縮小，廃業に追い込まれました。
しかし，学問研究は真理の探究という道からそれれば，もはや学問ではなく，まして御用学問となればもう学問とはいえないでしょう。社会の進歩には学問研究による真理の探究はなくてはならないものです。そういう時代の流れの中で，後退する分野もありますが，真理の探究を前進させている分野もあります。（創風社では障害児医療など）。
創風社としては，真理の探究という旗を下ろすことなくさまざまな工夫（製作・宣伝へのデジタル利用，自社倉庫など）をして本来の出版活動を続けられる道を探しながら，今日まで続けてくることができました。創立して 37 年間の創風社の歴史を振り返ってみると，下降線を辿ってきましたが，「真理は前進する，いかなるものもそれを妨げることはできない」（エミール･ゾラのことば）（稲葉三千男『ドレフュス事件とエミール・ゾラ―告発』創風社）を一度も疑ったことはありません。社会の進歩・前進は真理を探究する学問研究の前進なしにはありえないとやはり今でも思います。
2023 年もよろしくおねがいします。

創風社　代表取締役社長　千田　顕史

コロナ危機，ウクライナ戦争などで経済のグローバル化に依存してきた日本も，物価高，IT 業界のリストラなどの影響の実感が高まる時代になって来ました。創風社もレンタルサーバー会社の事情で HP やメールも不具合が生じ，利用できない状態になっています※。紙媒体の存在価値が再認識される時代になりそうです。今年もよろしくお願いします。

※ 1/6 現在復旧することができました。

創風社　編集長　髙橋　亮